

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5677号

7月号

令和5年7月3日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



## 【特に注意を要する事項】

なし

## 【予報のポイント】

梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	30	40
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

## 【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

### <1 週目の予報> 7月1日(土)～ 7月7日(金)

梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすいため、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

### <2 週目の予報> 7月8日(土)～ 7月14日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

### <3 週目から 4 週目の予報> 7月15日(土)～ 7月28日(金)

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

## 普通作物

### ◆早期水稲

---

#### 一 水管理と病害虫防除

収穫直前までの水管理は、間断かん水を基本とし、収穫5日前を目安に落水します。

カメムシ類の被害防止のため、穂揃い期とその7～10日後の2回防除を徹底しましょう。さらに、発生が多い場合には追加防除を行います。

#### 二 収穫と乾燥調製

収穫適期は全籾の8割が黄化した時期です。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は40℃以下で行います。毎年、過乾燥の玄米が多く見られるため適正水分の14.6～15%に仕上げましょう。

### ◆普通期水稲

---

#### 一 水管理と病害虫防除

中干しは茎数が20本程度の頃に始め、田面に足跡が軽く付く程度に干します。中干し後は走水を1～2回行い、その後は間断かん水とします。

また、葉いもちやウンカ類の予察情報に注意し、ほ場をよく観察し適期防除に努めます。

#### 二 追肥

穂肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1cmの頃が適期です。必ず葉色を確認し、適正な量を施用しましょう。

### ◆大豆

---

#### 一 ほ場準備と播種

pH6.0から7.0となるよう苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮しながら調整します。湿害防止のために、ほ場の周囲には排水溝を設置します。播種は、発芽安定と鳥害軽減のために薬剤を粉衣し、条間60～70cm、株間21cmを目安とします。なお、播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(福川 泰陽)

## 果菜類

### ◆夏秋野菜の高温対策

---

露地きゅうり、雨よけトマト類、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では、梅雨明け後の高温対策が重要になるため、日中にハウスを解放して換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用して2～3割程度の遮光を行い、ハウス内の気温をなるべく下げること、果実・葉の温度が上がらないように管理します。また、循環扇を利用すると、温度上昇を抑制する効果があります。特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるため、早朝からのかん水や、前日の夕方のかん水が萎れ予防に有効です。

薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の薬害が発生しやすいため、午前中の早い時間帯か午後温度が低下する時間帯に行いましょう。

また、雨よけトマト類では、トマトキバガの発生に注意して、摘葉した残渣は適正に処分しましょう。

## ◆いちごの育苗管理

---

定植までの日数を逆算し、7月中旬頃には必要な子苗を確保し、良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水は、晴天時は早朝に充分行いますが、日中に乾燥するようであれば、夜間に過湿にならない程度にかん水を追加しましょう。特に、採苗する際に、ランナー先端の子株の不定根が茶色く変色しているときは、親株へのかん水の量や回数が不足していることが考えられるため、かん水方法を見直しましょう。

病虫害防除では、炭そ病の定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には、周辺の株とあわせて直ちに処分しましょう。また、うどんこ病予防のために、ケイ酸カリを1株あたり2～3g施用しましょう。

(吉山 健二)

## 葉茎根菜類・いも類

### ◆かんしょ

---

生育不良の株は、地際の茎を確認し、黒～褐色に変色している株や、茎が割れている株は、基腐病やつる割病の恐れがあるため、袋に入れて持ち出し、あわせて、周辺株へ殺菌剤を散布しましょう。

排水不良のほ場では病害拡大の恐れがあるため、排水路の点検・整備を細やかに行います。また、次作の種芋を採取するほ場に入るときは、病原菌を持ち込まないため、農機具や長靴は洗浄したものを使います。

採苗が終わった育苗ほは、温度が高い夏場に残さ分解と土壌消毒を行きましょう。

### ◆さといも

---

疫病対策として、新しい葉の展開に併せ、殺菌剤が株元までかかるように定期的に防除を行い、台風後には治療効果のある農薬を散布しましょう。

3月植えの石川早生は下旬から収穫期となります。試し掘りを行い、肥大状況を確認してから収穫を始めます。収穫が遅れると「水晶芋」が発生し、品質低下につながるため、適期に収穫します。

### ◆しょうが

---

今月上旬が1回目の追肥適期です。10aあたり窒素成分で3～5kgを施用し、土寄せも行います。追肥後は、土壌の乾燥防止や地温上昇抑制、抑草のために、刈草や稲わらを敷きましょう。

梅雨明け後は涼しい時間帯にかん水します。畝間かん水をする場合は停滞水が発生しないように畝間にくぼみをなくしましょう。

### ◆秋冬野菜の土づくり

---

収量・品質向上のためには、夏場のほ場管理が重要です。今月は土壌pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行きましょう。

(川崎 佳栄)

# 果樹

## 1 常緑果樹

---

### ◆ かんきつ全般

雨天日が多くなり、黒点病の防除が特に重要な時期となります。薬剤散布から合計300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があったら、晴れ間を利用して薬剤散布を行いましょう。

### ◆ 温州みかん

7月中旬から収穫前までは仕上げ摘果の時期です。今年は表年傾向で着果数が多い傾向にあるため、果実肥大促進のために摘果を徹底しましょう。極早生品種の7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果しましょう。

### ◆ 完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色かび病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を徹底するとともに、枝をゆすって、花びらを落としましょう。ビニル被覆を行っている園地では、高温による結果不良が出始めるため、梅雨明け後は早めに天井ビニルを除去しましょう。

### ◆ マンゴー

炭そ病や軸腐病の発生が多くなる時期です。こまめな収穫や、殺菌剤の散布を徹底しましょう。また、梅雨明け後は強い日射により日焼けが発生しやすくなります。遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫後は、剪定作業を行います。7月下旬以降の剪定は、新梢の充実が不足し、花芽形成が不安定になるため、早めに行いましょう。また、枝の切り口にはペースト剤を塗布します。

既に剪定が終了し、新梢が発生している早期作型園では、葉面散布や新梢の整理、発根促進剤を利用することで、新梢の充実促進を図りましょう。

(黒木 宏憲)

# 花き

## ◆キク共通

---

梅雨明け後は、日差しの強い日が続くため、葉焼け等が発生しやすくなります。遮光や換気を積極的に行い葉温を下げるとともに、蒸散量の増加に見合うように適宜かん水を行います。また、親株床での病虫害防除を徹底しましょう。

## ◆夏秋ギク

---

「精の一世」の8月出荷作型では、花芽分化・発達を促すために、消灯後から11.5時間日長でシェード管理を行います。なお、高温による開花遅延や奇形花の発生軽減のために、日中の換気に努め、夜間のシェード開放を行いましょう。

「フローラル優香」では、消灯後から2週間程度、12時間日長でシェード管理を行います。なお、高温や消灯遅れ、多肥は貫生花の発生を助長するため、適正管理に努めましょう。

## ◆洋花類共通

---

秋に定植予定のほ場は、土壌分析結果に基づいた適正施肥を行うとともに、病害や連作障害を回避するために、土壌消毒を実施しましょう。なお、太陽熱消毒や土壌還元消毒を行う場合、開始時期が遅くなると、十分な消毒効果が得られない恐れがあるため、早めに準備を行いましょう。

## ◆ホオズキ

---

8月出荷分は、上旬から段階的に摘心及び着色のためのホルモン剤散布の時期です。効果を安定させるために、散布の前後5日間は病虫害防除を控えましょう。また、散布後の高温は着色不良の原因になるやため、涼しい時間帯に散布し、散布後数日は必ず寒冷紗で遮光しましょう。

## ◆キイチゴ

---

過度な収穫や乾燥により樹勢が低下して枯死する恐れがあります。樹勢維持のために太めの枝を数本残し、長期間降雨がない場合はかん水を行いましょう。

(山塚 裕美)

# 畜産

## ◆家畜防疫対策

---

鳥インフルエンザについては4月7日の発生以降、国内での新たな発生は確認されていませんが、アジア圏では口蹄疫やアフリカ豚熱、鳥インフルエンザの発生が引き続き確認されています。家畜、家禽を守るために、畜舎内外の消毒はもとより、人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準に基づく対策を徹底しましょう

## ◆家畜

---

梅雨明け前後は家畜が暑熱ストレスを受ける時期です。畜舎への風通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、暑熱対策を十分に行います。直射日光を遮蔽するための寒冷紗の設置、屋根への石灰塗布、屋根散水などによって畜舎内の温度上昇を防ぐことも有効な暑熱対策となります。夏期は全ての家畜で他の季節より多くの水が必要となるため、いつでも新鮮な水が飲めるように水槽やウォーターカップのチェックをこまめに実施しましょう。

## ◆飼料作物

---

トウモロコシやソルガム等の刈り取りが始まる時期です。今年もツマジロクサヨトウが県内各地で散見されています。自分のほ場の被害の有無をこまめに確認し、発生が見られた場合は薬剤散布をしましょう。また、飼料用イネは雑草が繁茂しやすい時期です。カメムシ等の害虫の密度を下げるためにも、畦畔を含む除草管理を徹底しましょう。

(小田 弥生)

## 特用作物

### ◆茶

---

#### 1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程度で三番茶の摘採期となります。この時期は、新葉の硬化が早いため摘み遅れに注意しましょう。また、燃料の価格が高騰しているため、荒茶の価格と経費を考慮し、計画的な摘採に努めましょう。

#### 2 病害虫の防除

新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイ、ハマキムシ類に注意してください。また、輪斑病に弱い品種は摘採後速やかに防除を行いましょう。

#### 3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は、中切り後60日程度と8月上旬の2回整枝を行います。また、二番茶後に深刈りした茶園は、8月上旬までに1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5節上げた位置で行います。特に、中切りした茶園では日焼け防止のために、2回に分けて整枝を行いましょう。

#### 4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意が必要です。土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎましょう。

1～2年生の幼木園は、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。また、ソルゴーの間作は防風効果が高いため台風対策に有効です。十分な草丈を確保するために、播種は必ず7月上旬までに行いましょう。

(竹田 博文)

### ◆しいたけ

---

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

#### 1 裸地伏せの場合

笠木は30～40cm程度の厚さとし、雨水が原木に均一に掛かるような掛け方とします。笠木幅は伏せ込みの高さ程度横に張り出し、原木に直射日光が当たらないようにしましょう。また、害菌発生を防ぐため、周囲の刈払いを実施しましょう。

#### 2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置します。遮光ネットとほだ木の間は20cm程度の空間を確保し、側面の両サイドは裾を広げ通風を図ります。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、林縁の草刈りを実施しましょう。

#### 3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害や害菌の侵入を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の細かな管理を行いましょう。

(堀川 和也)

## ◆たばこ

---

今月は、総かぎ収穫が主な作業となります。

### 1 総かぎ時の注意点

総かぎは、未熟葉の収穫を避けるため、上位葉（4枚目）の成熟を確認して開始しましょう。成熟の目安としては葉色だけではなく、葉や中骨が左記の状態（①～③）になっているかを確認し、総かぎすることが大切です。

葉の表面が凹凸になり葉

先が枯れる。

葉全体が下方に巻き葉柄部が下った時（肩を落す）。

上位葉（4枚目）の中骨が白化して中骨の表面が平らとなり中心にミゾができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

着区区分を徹底するとともに過熟の、流れそうな合葉の拾い取りを確実にいき、収量確保に努めましょう。

上葉は、4枚程度を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。

立枯病様葉は、活力のあるうちにグジリ取りを行い、当日吊込み乾燥しましょう。

### 2 残幹根の整理

残幹根は、土壌中の病原菌密度の増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

### 3 品質管理対策

異物・異臭・貯蔵虫害発生防止のため、作業場の定期的な確認と清掃を行いましょう。

また、出荷までの貯蔵期間が長いので包の吸湿による品質低下を防ぐために、取り下し、荷造り時、貯蔵中の水分管理により一層注意しましょう。

（宮崎県たばこ耕作組合）

## 農作業安全

今後、蒸し暑い日が続きます。こまめに水分を補給し、熱中症予防に努めましょう。

## 内容の詳細について

---

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

（<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>）

## 向こう1カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	いもち病(穂)	並	<p>上位葉の葉いもちは穂いもちの発生につながるため、穂ばらみ期後期と穂揃期の防除を行います。さらに、出穂期及びその後も降雨が続き、穂いもちの発生拡大が予想される場合は、穂揃期の7～10日後にも追加防除を行います。</p> <p>カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生に注意し確実に防除します。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。防除後も残存虫が確認される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。</p>
	セジロウンカ ヒメトビウンカ 斑点米カメムシ類	並 並 並	
普通期水稻	いもち病(葉)	並	<p>本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。移植時に箱施薬をしていない水田では、防除が手遅れにならないように注意します。</p> <p>海外飛来性害虫(セジロウンカ)の本県への飛来が確認されています。飛来状況については、当センターのホームページ等で随時情報提供していますので、確認してください。</p> <p>ニカメイガは、近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認されています。7月上中旬頃の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、粒剤の水面施薬か捕殺を行います。</p>
	ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガイ	並 並 並 — — 並	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類  ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	やや多  並 やや多	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から防除します。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐために、防虫ネット等で被覆すると効果的です。</p> <p>チョウ目害虫の幼虫は老齢期になると防除効果が不安定になりますので、若齢期を中心に防除を行います。</p>
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。
サトイモ	疫病	—	圃場の見回りを行い、発生を認めたら直ちに、薬剤が下葉に達するように十分量を散布しましょう。
サツマイモ	基腐病※	—	発病株(つるや塊根)は速やかに抜き取り、ほ場や周辺に残さないようにするとともに、定期的に登録のある薬剤で防除を実施します。なお、散布する際は、株元にしっかりと薬液がかかるように注意しましょう。
果樹全般	チャバネオカメムシ ツヤアオカメムシ	やや少 少	<p>予察灯へのチャバネオカメムシの誘殺数はやや少、ツヤアオカメムシの誘殺数は少の状況です。</p> <p>成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがありますので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。</p>
かんきつ (露地栽培)	黒点病 かいよう病	やや少 並	<p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p> <p>かいよう病は、発病した枝葉は伝染源となるので、できるだけ除去し園外に持ち出し処分します。</p>
	ミカンハダニ チャノキアザミウマ	並 並	
茶	炭疽病	やや多	二番茶残葉に炭疽(たんそ)病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除します。
	カンザワハダニ チャノコカクモソハキ チャハマキ チャノボクガ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 やや多 やや多 並 並	<p>チャノミドリヒメヨコバイは、新芽が加害されると減収や品質低下を招くため、萌芽期から開葉期にかけて薬剤散布を行います。チャノボクガは、フェロモントラップ調査によると次の発蛾最盛期は7月下旬～8月上旬頃で、発蛾最盛期の約10日後が防除適期です。</p> <p>クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸すると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行います。</p>

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比べ今後の発生量がどの程度になるかを予測したものです。
- 2) ※は防除情報、※※は注意報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki>です。

